

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌  
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1  
 柿生中学校内  
 電話:044-988-0004(柿生中学校)  
<http://www.kakio-kyodo.com>  
 第 82号

## 鶴見川流域の鉄文化の痕跡を探る

# 鶴見川流域の鉄文化を科学の目が解き明かす

### \*\* (2)鉄渋と朱塗り土器の分析 \*\*

柿生には、鉄関連の痕跡が大変多いように思えます。例えば鶴見川や、その支流の麻生川、片平川等の川底でよく見かける「鉄渋」があります。地層中に含有する鉄成分が地下水に水酸化鉄として溶けだし、河川に堆積したもので、色は赤褐色や黄色で、「褐鉄鉱 FeO(OH)」「沼鉄鉱」「リモナイト」とも呼ばれています。

水酸化鉄はその他、鉄バクテリアと関係すると沼地などで葦やイネ科植物の根に付着、成長し5センチ前後の小さな円筒形の鉱物を作り上げます。それは「高師小僧(たかしこぞう)」という愛称でも呼ばれています。これも褐鉄鉱の一種です。

王禅寺あたりの湖沼にも、この高師小僧が発見されるのではないかと密かに期待しているところですが。実際に多摩川流域では高師小僧が発見されたことが報告されています。

今回、栗木にお住まいの史料館支援委員の飯草康男氏にお手伝いいただき、片平川河床で「鉄渋」を採取しました。さらに日鉄住金テクノロジーの伊藤薫氏にお願いして、採取した泥状の「鉄渋」を乾燥、粉末化して約 800~1000℃で加熱していただいたところ鮮やかな赤褐色に変化する事が分かりました。



高師小僧



片平川の鉄渋  
(朱色に染まった流水)

東柿生小学校の体育館を建設する際に行われた発掘調査で、古墳時代の朱塗りの土師器が発見されましたが、これは、祭祀の際に使用されたものではないかと考えられています。この赤色顔料に関しては、粉末状の「褐鉄鉱」を加熱して作る「紅殻(ベンガラ)」という顔料が使用されたか、あるいは「丹(に)」という水銀系の硫化水銀からなる赤色の鉱物「辰砂(しんしゃ)」から採取したものかと考えられます。伊藤氏の分析の結果、小学校周辺にあった小土器片の赤色は、地元由来と思われる「ベンガラ」を、焼きあがった土器の表面に塗ったものだとは判明しました。

さらに、注目する土器片も見つかりました。土器に朱を塗るのではなく、粘土に顔料を直接混ぜ込んで成形したものもありました。伊藤薫氏に土器内部を分析していただいた所、粘土に混じって水酸化鉄由来の成分が認められました。伊藤氏の推測によると、柿生周辺に褐鉄鉱が多く認められたという事は、古代、「ベンガラ」を交易品とした物流交換がこの地域でもあったであろうとのことです。

なお、自然の褐鉄鉱は個体状のものだけではなく、粉末状として産出するものも多く在ります。例えば、熊本県の阿蘇山で産出するものは、9万年前~30万年前の大噴火で出来た火口湖に、鉄分の多い水が溜まり沈殿して、それが地下に堆積したものです。昭和 54 年に熊本県阿蘇町一帯で弥生時代の古墳が発掘されました。その石室や石棺からは、鮮やかな赤色のベンガラが大量に発見されました。

これは、阿蘇山から採れた褐鉄鉱(リモナイト)を使用したものであることが分かっています。

日本の3世紀中頃の様子が記述されている中国の「三国志」魏志倭人伝には「(日本では)朱丹を使って身体に塗る。それは中国の粉を用いる事に似ている」「正始四年(243年)倭王、使い八名を遣わし、生口(奴隷)・倭錦(模様のついた織物)・綿布・丹・短弓矢を献上した」と書かれています。ここに書かれた「丹」とは多分ベンガラの事だと思えます。このように日本では、古代より、この水酸化鉄を使用した顔料が広く使用されていた事が考えられます。

柿生においても、河川で多くの「鉄渋」が目撃されることから、この顔料は古くから使用されていたと考えられ、更に周辺地域への重要な交易品でもあったのではないかと考えられます。

柿生周辺で採取される「鉄渋」が古代人の生活にとって、切り離せない、重要な特産品であったのではないかとこの事も、今回の実験で裏付けられそうです。

なお、今回の実験につきまして、東柿生小学校の小川校長先生より多大なるご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。(文:板倉)

平成 27 年度の「友の会」申し込み受け付けは、4 月 1 日より開始いたします。詳細は次号の柿生文化(4月号)に掲載いたします。何卒、宜しくお願い申し上げます。

## シリーズ

## 「麻生の歴史を探る」第52話

## 麻生の寺院(2) 潮音寺・香林寺

小島 一也 (遺稿)

高石の潮音寺は、鎌倉建長寺末、義経・弁慶の大般若経、市の文化財を持つ寺で有名な菅の寿福寺(臨済宗)の末寺といわれています。寺伝によると、永享年間(1428~1440年)に、寿福寺三世日峯法朝なる僧によって現在とは異なる地に創建されました。しかしその後、寺運が衰え、江戸時代になって高石村の領主加々美金右衛門正吉が、三男十左衛門潮音の死を悼み、承応元年(1652)に万松山潮音寺として再建したと伝えられています。

この加々美家は元武田氏の家臣でしたが、正吉の父正光の代に主家の滅亡に伴い高石村に移住しました。正光は村の開拓に務めた実力者と言われ、徳川家に仕えて、高石村字本村谷に屋敷を賜りました。古刹法雲寺を建立(第67号第37話「笹子姫と法雲寺」参照)した仏心に篤い人物で、寛永6年(1629)に没しています。当時廃寺同然だった旧潮音寺ですが現在は高石の字本村にありますので、子の正吉が父正光の遺志を継ぎ、拝領の敷地内に本寺である寿福寺譽心上人の協力を得て、移築再建したのではないのでしょうか。

この潮音寺は正吉が寄進した三段九畝(約3900m<sup>2</sup>)の広い寺域を持っていました。現在でも街中であって寺域はほぼ維持され鐘楼堂や駐車場があり、墓地には高石村開拓の五苗といわれた加々美・吉沢・笠原・木下・石塚各家の墓石が、寺の歴史を物語るがごとくに存在しています。なお、この寺は大正12年の関東大震災で全壊し、再建されますが、昭和56年に鉄筋コンクリート建てで改築されています。

荘厳な本堂には本尊聖観音菩薩座像が安置されています。この像は高さ一尺二寸(約40cm)の木造で、その胎内には五寸程の聖観音が納められています。新編武蔵風土記稿によれば「(胎内の聖観音は)行基菩薩の作なりという、この本尊及び過去帳は旧院の汁物にして、本山よりここに移せしものなり・・・」と、寿福寺→旧潮音寺→現潮音寺へと法灯が引き継がれていることを記しています。

五重塔で知られる細山の香林寺の創始は、潮音寺とは異なり、一般農民の仏教信仰から創設されたものです。寺の沿革は大永5年(1525)に、同じ寿福寺の六世南寿法泉によって「高林坊」なる寺が創建され、江戸時代初期の慶長年間(1596~1614)に鎌倉建長寺の僧が中興開山となり、現在の「南嶺山香林寺」となったと伝えます。しかし風土記や伝承によると、この寺にはそれ以前の古い由来があるようです。



香林寺と十一面観音図(右)

新編武蔵風土記稿でこれを探ると、「・・・文禄三年(1594)の水帳には高林坊と記せり、観音の別当所なりとう・・・観音の縁起は文明元年(1469)にかきしものなれば、この堂の建ちしは、なお古き代のことなるにや、客殿六間半に五間半本尊十一面観音を安ず、これを身替観音と号す・・・」と記しており、さらに古碑が4基あって、それぞれ永仁三年(1295)、貞和四年(1349)、明德二年(1391)、応永十七年(1418)と刻印されていると見え、鎌倉時代永仁の頃よりの古い由来があることを述べています。

また、伝承によるとこの十一面観音は弘法大師の作と言われ、文明元年(1469)因幡国(鳥取)高草郡清水の長者の屋敷から移されたとするもので、「長者が夜、強盗に襲われ、顔に二ヶ所の傷を負ったが、翌朝気付くと顔に傷はなく、代わって秘蔵の観音様のお顔に二ヶ所の傷が付いていた」ことから「身代りの観音」と崇められました。この時期、この地には阿弥陀信仰の板碑が多く造立されており、その農民の仏教信仰が観音堂を建立させたと思われるのですが、それは永仁年間からのことで、細山の仏教風土が分かります。残念なことにこの観音像は文政13年(1830)の火災で焼失しましたが、幸いにも檀家の家から実像のお姿の掛け軸が発見され、現在本堂内陣に大切に掲げられているとのこと。

有名な五重塔は、昭和62年の建立で、高さ約50m、総檜造り、日本で唯一の唐様(禅宗様式)の塔で、川崎の新名所となっています。さらに境内には「太子堂」と呼ぶ堂宇がありますが、これは大正10年、細山・高石の太子講組合が奉納したもので、堂内には、小像ながら高村光雲作の聖徳太子像が納められています。

なお、この細山の地には慶長3年(1598)浜坂高勝寺の門徒、獄照寿仙なる僧が、延命院と呼ぶ真言道場を開設しますが、廃寺となり、獄照寿仙の過去帳、後継の智海上人の墓は香林寺に移され、衣鉢がこの寺に継がれているようです。

参考文献:「新編武蔵風土記稿」「川崎地名辞典」「麻生区の神社と寺院」「生田村郷土のしるべ」



## 日の丸あれこれ (3)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

### ◆「海軍御国旗」の制定◆

「陸軍御国旗」が定められると、当然海軍も黙っていません。同年 10 月、太政官布告第 651 号で、「海軍御国旗」が定められました。横 1 丈 1 尺 7 寸(約 351cm)縦 7 尺 8 寸(約 234cm)と 3:2 の比率に、縦の 5 分の 3 の紅の日章というものでした。大きいことも大きいのですが、「商船国旗」とは縦横の比率が違っていました。商船用、陸軍用、海軍用と夫々の用途に応じてサイズ等が違っているのですから、明らかに使用目的に応じて、機能的に異なる寸法、デザインが混在していたのです。

当然、混沌とした状況の中から、次第に明治国家の輪郭や方向性が見えてくると、このままでは具合が悪い、何とか「国旗」の一本化をしなければという議論が出てきます。この点を記す前に、当時の「朱の丸」の利用状況を辿ってみたいと思います。



海軍御国旗

### ◆「朱の丸」旗の使用状況◆

1870(明治 3)年は、「商船国旗」、「陸軍御国旗」、「海軍御国旗」と制定が続いたのですが、翌明治 4 年になると、兵部省所轄の船を除く一般船では、「朱の丸」旗の掲揚は洋式船に限られ、和船は大小を問わず、領海内での「国旗」の掲揚を禁じられます。どういう事情があったのか、定かでないのですが、おそらくは政府自身に、いまだ船舶用の国籍表示旗の概念が、良く呑み込めていなかったための混乱だったのでしょう。

1872(明治 5)年になると、今度は開港場を持つ各県庁に対し、祝日には商船用の大旗、平日には同じく中旗を掲げるようにとの通達が出されます。ここに「朱の丸」は陸上でも掲揚されるようになったのです。この年 9 月 12 日には新橋～横浜間の鉄道が開通、明治天皇も列席して盛大な開通式が行われました。会場となった新橋駅の式典会場では、日章旗がへんぼんと翻り、見物に訪れた群衆に深い印象を残しました。

そんないきさつもあって、11 月に入ると、当時の東京府知事から、「一般国民から、『日の丸』を掲げたいとの希望が出されているが、掲げてもよろしきか」という伺い書が、政府に出されます。それに対して、「日章国旗の旗型を相掲げ候は苦しからず…」と、この願い出は許可されています。このいきさつから読みとれることは、「国旗」は政府の印であるから、一般の国民が勝手に作ったり、掲げたりして良いものではないという感覚が、政府と民間の双方に共通の理解となっていたという事実です。



鉄道開通式(部分)「朱の丸」があちこちに 小村雪岱画

ここには、明治 5 年の 12 月 2 日をもって大陰暦(旧暦)の使用をやめ、翌日 12 月 3 日を明治 6(1873)年の 1 月 1 日とする、太陽暦(西暦)への急な変更への思惑も働いていました。東京府知事のお伺いにも、旗型なら苦しからずという政府の回答にも、急な改暦による庶民の戸惑いを払拭し、お祝い色を盛り上げようという計算が働いていたのです。

本物の「国旗」ではない、旗型なら掲げても苦しゅうないというお達しに、喜んだ国民は早速明治 6 年の元日に旗型を掲げました。最近ほとんど見かけなくなっていますが、元日に国旗を掲げる習慣は、この時期に生まれたのです。

以後政府は、明治天皇の誕生日である天長節(11 月 3 日)や紀元節(2 月 11 日)など、政府の国策に合う祝日に「国旗」の掲揚を認める一方、伝統的な行事であるご節句やお盆の際の掲揚は、断乎として認めない姿勢を貫きました。そのため伝統重視派は不満を募らせることになったのですが…。

この時期、明治政府はいまだ「国旗」の扱いに慣れず、官公庁への掲揚や祝祭日における一般家庭での掲揚について、なお試行錯誤を続けていました。広く「国旗」の掲揚が普及するためには、なお時間が必要だったのです。

繰り返しになりますが、一般家庭で掲げられるのは、なお「国旗」の雛型であって、本物ではありません。商船用の小型旗でも、陸上のしかも一般家庭で掲げるには、大き過ぎるからです。いったいどれが本物の「国旗」の寸法なのか。全てが本物なのか。そうではないのか。ここにも解決すべき問題が残っていました。

### ◆「朱の丸」から「日の丸」へ◆

明治初年に「朱の丸」と表記されていた日章旗は、次第に「日の丸」と称されるようになります。明治 10 年を過ぎると、「朱の丸」という表現は、急激に少なくなってゆきました。

1877(明治 10)年に入ると、洋式船か和船かを問わず、外洋を航海する船舶全てに対して、日章旗の掲揚が義務付けられます。「日の丸」は、諸外国に対する日本国籍の表示旗として、日本国旗の意味を正式に果たすようになったのです。

(続く)

柿生郷土史料館歴史見学バスツアー第2弾

# 募集

## 小田原周辺の史跡見学

行 程：小田原城址公園 天守閣・歴史見聞館・郷土文化館・御用米曲輪（発掘中）→ 昼食（割烹だるまの予定）→ 報徳二宮神社 → 石垣山一夜城公園 → 曾我神社と城前寺（曾我兄弟墓所）または玉宝寺（五百羅漢）または石橋山古戦場と佐奈田神社のうち1か所

開催日：2015年4月21日（火）

集 合：午前7時45分 新百合丘駅北口 出発：午前8時

解 散：午後6時30分頃（柿生駅→新百合ヶ丘駅）

募 集：45名（先着順、定員になり次第締め切り）

費 用：7,000円（詳細未定につき、概算です）

申込み：3月25日までに往復葉書に必要事項（郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号、参加者全員の氏名・年齢）を記入の上、柿生郷土史料館宛（住所は1面トップ参照）にお送りください。

問合せ先：担当 小林基男（電話 080-5513-5154、044-989-0622）



### 柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日：奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日

**3月** 8・15・22・29日（毎日曜日） 注：1日は休館です。 **4月** 4・11・18・25日（毎土曜日）

訂正：先月号で3月1日を開館としていましたが、休館の誤りでした。お詫びして訂正させていただきます。

◎開館時間：午前10時～午後3時

### 柿生郷土史料館3月以降の催物ご案内（入場無料）

#### 第7回 特別企画展

## 新聞で見る近代日本の歩み展

### ◆◆明治・大正・昭和の歩みと人々の生活◆◆

会場：柿生郷土史料館特別展示室

(第1期) ◎明治初年の新聞雑誌を公開  
◎新聞広告からみた明治の生活  
期間：1月25日(日)～4月25日(土)

(第2期) ◎明治の政治と対外関係  
期間：5月17日(日)～8月22日(土)

#### お詫び

展示内容が当初の想定より多くなった関係で、期を分けて展示することといたしました。従って今までのご案内とは若干内容が違ってまいります。ご了解のほどよろしくお願いたします。

#### ミュージアムトーク (特別企画展事物の解説)

日時：4月11日(土) 午後1時30分～  
会場：柿生郷土史料館特別展示室  
講師：小林基男氏（桐蔭大学講師）

#### 第52回 カルチャーセミナー

## シンポジウム 小島一也氏を偲んで



日時 3月15日（日）午後1時30分～  
会場 柿生郷土史料館

昨年12月5日、逝去された元柿生郷土史料館支援委員長の小島一也氏の業績や人となりを、共に歩まれた方々よりお話を頂きながら、在りし日の氏のお姿を偲びたいと思います。たくさんの方々のご参加をお待ちいたします。

### ついに完成！

ふるさと柿生の記憶をDVD化  
第1弾

## 「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

### ◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

柿生郷土史料館では、郷土に継承されてきた貴重な無形文化財を映像化し、後世に伝えたいと考えています。

この度、上麻生浄慶寺境内に在る秋葉神社を取材し、秋葉神社が長い間存続してきた意味や人々の姿を視点に入れながら、DVD制作に取り組んでみました。

なおDVDをご希望の方にはお分けしておりますので、柿生郷土史料館に直接お越しいただき、お申し出ください。なお、その際、史料館の諸活動支援のためご寄付にご協力いただければ幸いです。

